

【フランス研究集会 井上円了とその時代】

井上円了の生涯

三浦節夫

Abstract:

INOUE Enryō 井上円了 is one representative of the "second generation of Meiji youth" that formed the foundation of Japan's modernization. He was born in 1858, and died in 1919. The achievements left by his sixty-one years of life were wide-ranging: he set up the "Philosophy Society" 哲学会; wrote on and promoted philosophy, Buddhism, and psychology; originated the discipline of "Mystery Studies" 妖怪学; founded Toyo University (the former "Philosophy Academy" 哲学館) and taught philosophy and various other western studies; made three world trips; traveled all over the country giving public lectures promoting social education and lifelong learning; and created the "Temple Garden of Philosophy" 哲学堂公園, a place for mental training.

井上円了は日本の近代化の基礎を形成した「明治青年の第2世代」の代表者の一人である。1858（安政5）年に生まれ、1919（大正8）年に逝去した。その61歳の生涯において、哲学会の創立、哲学、仏教、心理学の著述を行いその学問を普及させ、「妖怪学」という学問を独創、現在の東洋大学（その前身の哲学館）を創立し哲学などの西洋諸学を教育、3回にわたる世界旅行を行い、民衆を対象とし全国各地を巡回・講演して社会教育・生涯学習を進め、哲学堂という精神修養の公園を創立するなど、多岐にわたる業績を残した。

1. 西洋との出会い

井上円了は日本の幕末、明治、大正という時代に生きた。生年は安政 5 (1858) 年で、生地は越後国長岡藩西組の浦村（現在の新潟県長岡市浦）である。生家は 200 年の歴史をもつ慈光寺という東本願寺（真宗大谷派）の末寺で、その長男として誕生した。真宗寺院の長男は、住職の後継者（候補衆徒）を意味し、幼い頃から住職に従って宗門の教育を受けて育った。

こうした環境に転機をもたらしたのが、明治維新の年であった。10 歳の円了が春から隣村の塾で学び始めたからである。塾の先生は石黒^{ただのり}忠^{たけのり} 憲^{のり}で、武士であったが、一念発起して江戸で蘭方医となった、23 歳の若くて情熱的な青年であった。円了が学んだのは、漢学と洋算の初歩である。しかし、円了を魅了したものは、石黒が江戸で身につけた「洋風」であった。

円了は、先生は洋風を好み、机をもって椅子とテーブルに代用し、試験のときには、成績優者に賞与として西洋紙 1 枚を授けられたが、その西洋紙の恩典は恩賜の銀時計よりも嬉しかったと語っている。石黒の塾には、なによりも伝統を重んじる寺院生活と異なる「洋風なもの」があり、また 23 歳の教師と 10 歳の生徒には互いに心を通い合わせるものがあつた。後年、陸軍軍医総監となった石黒は、円了が、通学できないほどの大雪の朝に、ただ一人で塾にきたことや、鼻緒が切れても裸足で時間までに通ってきたことを、自伝に特に記している。

この円了の一徹な精神と常識を超えた行動力は彼の個性であった。円了の明治維新とは、長岡藩の戊辰戦争の体験や佐渡に起きた廃仏毀釈の事件よりも、石黒から「洋風」という新しい文化・思想を学んだことであろう。塾は石黒が上京したので 1 年間で終わった。

その後、円了は 4 年間にわたり藩の儒者から漢学を学び、同時に英語の初歩も学習した。漢学を終えてから、円了は洋学（英学）に転じ、明治 7 年に長岡洋学校の後身である新潟学校第一分校に入学する。英語で世界の歴史や地理を学び、数学も本格的に習った。当時の読書の履歴が残されているが、その中には福沢諭吉を初めとする西洋の啓蒙書が多数ある。その影響と洋学教育により、18 歳のとき、円了は自由民権や文明開化のことを漢詩に読んでいる。このように明治初期の思想に関心をもつ一方で、円了は自分がひそかに仏教の真理にあらざることを感じ、早くその門を去って世間に出ることを渴望していたという。洋学校で二年間学び、卒業後は

成績優秀により漢学と数学の助教を勤めていた。

2. 哲学と仏教との出会い

長岡の円了へ、京都の東本願寺から「至急上洛せよ」との命令があったのは、明治10年7月のことである。13歳で得度していた円了は、すぐに京都へ向かった。当時の東本願寺の教団は、明治新政府の宗教政策の転換、開国にともなうキリスト教の布教など、新しい時代への対応に迫られていた。そのため、新しい教学体制作りを急いでいた。各地に教校を設立して僧侶の教育を行なおうとし、その教員の養成に着手して、全国の1万カ寺から優秀な数十名の人材を本山の教師教校と育英教校で育成していた。円了は新設された教師教校の英学部を選抜された五名のうちの一人であった。

およそ半年後、英才と見込んだ東本願寺は、円了に対して東京留学を命じた。東京には前年の明治10年に、西洋諸学を移入するために日本初の大学・東京大学が創立されていた。

予備門は掲示文書まで英語で行う学校であり、円了が習った英語は「night」を「ニグフト」と読む変則流であったから、英語の点数が低かったが、数学がほぼ満点だったので、平均して合格し、予備門の第一期生となった。予備門は学年末の試験で2割ほどが落第する厳しい環境であったが、円了は首席を競うほどの成績であったという。こうして明治14年に文学部に進学した。哲学科の入学生は円了ただ一人であった。

当時の東京大学は、お雇い外国人教師が英語などの原語で授業を行なう時代で、西洋の近代的知識がそのまま教授された。同級生は当時の円了について、学生団体の幹事として切り盛りし、運動会や演説会の企画では驚くようなものを考えたり、社交的な性格があった反面、大の読書家で、図書館などでいつもその姿を見たり、騒がしい寄宿舍の部屋でも独り沈黙を守って読書に耽ることができる稀な集中力の人であったと評している。

こうした読書と思索を通して、円了はギリシャを起源とする西洋の哲学の本質を理解するようになった。それは「真理とは何か」の究明であった。円了は、自分が十数年来刻苦して渴望した真理は、儒仏両教中になく、ヤソ教中にもなく、ひとり

西洋の哲学中にあることを知った。このときの自分の喜びはほとんど計ることができないものであったという。

哲学界内に「真理を発見した」円了は、その見方から他の旧来の諸教を再検討したところ、ひとり仏教の説だけが大いに哲理に合するものであることをみたという。そしてさらに仏典を考証して、「なんぞ知らん欧州数千年来実究して得ところの真理、早くすでに東洋三千年前の太古にありて備わるを。」という結論を得た。それは明治18年、大学4年生のことである。

3. 哲学館の創立と妖怪学

50名近い東京大学の卒業生の「総代」となった円了に対し、恩師の石黒は文部省への就職を斡旋したが、円了は固辞した。すでに、東本願寺へ学校設立の上申書を提出していたからである。その上申書には、国が開国して、内務ばかりでなく、外務を設けたように、教団も自教の性質を研修すると同時に、西洋諸学やキリスト教を研究する時代にはいっており、仏教館、哲学館の両館を創立し、僧俗学問の中心、日本教海の標準とならんことを願うというものであった。学校創立の交渉は再三再四にわたって行なわれたという。20歳代の円了が大教団への復帰を拒み、自説を主張して譲らないことに、教団関係者は驚いたであろう。

この間に、円了は『真理金針』『哲学要領』『哲学一夕話』を出版するなど著述に専念した。そして、明治20年2月、29歳の円了は、これらの著作の結論を簡潔にまとめた『仏教活論序論』を刊行した。同書の冒頭で、「余つとに仏教の世間に振るわざるを慨し、自らその再興を任じて独力実究すること十数年、近頃始めてその教の泰西（西洋）講ずるところの理哲諸学の原理に符号するを発見し、これを世上に開示せんと欲して、ここに一大論を起草するに至る。」という。

この序論で、円了は仏教を再興するには、真理を愛する＝愛理、国家を護する＝護国の二つが必要で、「護国愛理」こそがこれからの日本社会を進歩させることを標榜した。この『仏教活論序論』は仏教界だけでなく多くの人々の支持を得て、大きな影響を与えた歴史的著作となった。ここで円了は仏教が真理であり、西洋の近代的知性の上にならなくて、その仏教を信じていることを宣言している。真理を愛することが、仏教の近代化の出発点となったのである。

同年 9 月、念願した哲学館は創立された。館主である円了はその設立趣意書で、同館が帝国大学哲学科の課程を促成するもので、日本語で講義し、余資なき者（経済的に恵まれない者）や優暇なき者（洋書を学ぶ時間に恵まれない者）を対象とする哲学専門の学校であることを明らかにしている（哲学館は円了個人が経営するものとなり、その後様々な困難を克服して、現在の東洋大学に発展している）。

哲学館は創立から間もなく、『哲学館講義録』を月に 3 回発行して、全国的に通信教育を行なった。その第 7 度（明治 26 年）の講義録として出版されたものが「妖怪学」である。「信じられるものと信じられないもの」を区別する形で真理を愛した円了が、西洋の心霊術の研究から不思議研究の必要を感じ、多年にわたって現地調査、文献調査などを研究した成果をまとめたものである。円了によれば、妖怪の研究は卑賤の事業に似ているかもしれないが、社会的には多方面に影響するものであり、人々の「心田の雑草を除去し」、宗教と教育の正しい道を開拓するものであるという。円了は旧来の日本人の思想感覚の問題点を「妖怪学」と名付け「迷信の打破」として取り上げたのである。

この『妖怪学講義』は占い、不知火、狐憑きなどさまざまな現象を、理学、医学、純正哲学、心理学、宗教学、教育学、雑の 8 部門に収めた大著である。円了の講義を口述筆記した人は、これだけ多岐にわたる項目を、傍らのメモを見ながら、順次に誤りなく口述できるという、円了の並みはずれた記憶力に驚いたという。妖怪学は近代化へ向かう日本社会に大きな影響を与え、円了は民衆から「お化け博士」「妖怪博士」として愛称された。

4. 全国巡講と哲学堂

円了は生涯に 3 度の世界旅行をしている。欧米諸国を中心としながら、世界の 5 大陸と北極・南極の臨む地を巡遊した。それにより、世界から日本を見続けたわけである。明治 35 年に第 2 回の世界旅行を行なっていた円了は、翌年 1 月にロンドンで「哲学館事件」が発生したことを知った。この事件は、文部省が哲学館の中等教員無試験検定校の認可を取り消したことに始まる。

文部省の視学官が卒業試験の学生の答案に、「弑^{しいぎやく}逆（民衆が君主を、子が親を殺害すること）」の文字を見て、哲学館は「不敬」「危険思想」の学校であると断定

したのである。学生はイギリス人の倫理学者の翻訳書をそのまま書いたに過ぎなかった。私学に対する過酷な処分と見た新聞・雑誌は、文部省への非難を繰り返した。半年間にわたり哲学館事件は一大社会問題に発展した。

事件の哲学館への影響は大きく、帰国した円了は館主として、この事件を「人災」と位置づけてその処理にあたったが、神経を病んでしまい、庭前で卒倒しそうになることが数回あったという。明治 38 年 12 月のある夜、円了は大学からの引退を決意する。独力で 20 年間経営した哲学館は大学となっていたので、これを財団法人「東洋大学」とし、引退した円了は移転予定地であった哲学堂（東京都中野区）の土地を個人で買い取ることにした。

一人の教育者に戻った円了は、すでに社会的に提案していた「修身教会」運動を進めることにした。修身教会とは、欧米の社会の国勢民力を支えているのが国民の倫理・道徳観にあり、それを育成しているのがキリスト教の日曜教会による民衆の教化にあると考え、日本の各市町村の寺院や学校で、修身を中心にした講習会を開催しようとしたものである。円了は教育勅語を契機とし、仏教による国民道徳の必要性を訴えて、全国各地を巡回して社会教育の講演をした。

その年間の開催日数は平均で 220 日を超える激しい巡講であった。最終的に全国の市町村数（平成 7 年度・1995）の 53% で講演したことになった。午前は移動、午後は講演、夜は揮毫という日程で、その揮毫の謝礼の半額を持ち帰り、哲学堂を公園として拡張していった。揮毫料を取ったことで「守銭奴」と非難する人や新聞で「井上円了さんの靴はキフキフと鳴る」と揶揄されることもあった（遺言では、大学や哲学堂を井上家が私有することを禁止し、財団法人として社会化することを指示していた）。

大正 8 年、61 歳になった円了は中国の日本人を対象とする巡講に出かけた。最後の大連に到着したのが 6 月 5 日である。出迎えたのは卒業生で東本願寺の別院の輪番で、円了はこのとき自らの信仰についてこう語った。「自分は年 50 をすぎて運命に順応することにした。それは親鸞聖人の教えで、自分はどこにいても祖師のご命日には謹慎して偉徳を敬慕している。」その夜の講演中に、円了は脳溢血を発病して、翌 6 日午前中に急死した。円了は近代日本に真理を愛して生きた「信念の人」であり、また理想を追い求めた「ロマンチスト」でもあった。

（三浦節夫・東洋大学ライフデザイン学部教授）